

驚きを合図するメトニミー表現について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027272

驚きを合図するメトニミー表現について

大 村 光 弘

キーワード：驚きの慣用表現、メトニミー、動作学、認知言語学

1. はじめに

(1)–(4) で用いられている「目を見張る」と「目を見開く」という表現は、小説でよく見かける慣用表現であるが、驚きを明示的に表す表現を伴っていないにも拘わらず、登場人物の驚きを合図している。

(1) 「あなたのお父さん、キド・コーポレーションの社長？」

相手は目を見張った。「なんでわかるの？」

(宮部みゆき、『クロスファイア』上)

(2) 「そこで彼らは決断した。この計画は失敗だ、ずらかるに限ると。しかも、これもまた稚拙であり雑であり妙ちきりんなところだけれど、現場をそのままにして逃げ出したんだよ」

滋子は目を見張った。「そのままにして？ 死体を放り出して？」

(宮部みゆき、『模倣犯』上)

(3) ちか子はしゃがみこんだ。棚の基部の、地面に接している部分を指さす。「これですよ。かがんで見てごらんなさい」

清水は言われたとおりにした。すぐに、彼は目を見開いた。

「溶けてる……」

棚の基部が溶けて、形が歪んでいるのだ。

(宮部みゆき、『クロスファイア』上)

(4) 「三人を分離公判にするかどうかでもモメてるし、向こうが精神鑑定を望んで、今やっつるところだから」

武上が目を見開いた。「三人ともかい？」（宮部みゆき、『模倣犯』上）

「目を見張る」や「目を見開く」といった表現が驚きと密接な関わりがあることは、(5)–(8)が示すように、これらの表現が驚きを表す明示的記述と共起することから明らかである。

- (5) 由美子はびっくり仰天という様子で目を見張っているが、文子の見るところでは、和明の方は明らかに怯えていた。（宮部みゆき、『模倣犯』上）
- (6) 「どうしちゃった……の？ ヒロミ、しっかり——」。
とりあえず口をついて出てきた言葉も宙ぶらりん、明美は驚きに目を見張った。（宮部みゆき、『模倣犯』上）
- (7) 「そこに誰かいる——あ！ あなたは！」
驚きに両目を見開いて、ナツコは声を呑む。
（宮部みゆき、『クロスファイア』上）
- (8) 逃げだそうとする淳子の前で、火がごうごうと燃えている。炎のかたまりの中心には子供がひとりいて、身体が燃える熱さのせいで踊り狂っている。その目が驚愕に見開かれ頬に涙が流れているのが淳子には見える。
（宮部みゆき、『クロスファイア』上）

「目を見開く」や「目を見張る」という現象が驚きに伴って現れる運動反応であることを考えれば、(1)–(4)は、(5)–(8)の下線部に相当する表現から明示的な驚きの記述が省略された、単なる省略版に見えるかもしれない。しかし本稿は、当該現象がメトニミー（換喩）の一種であると主張する。但し、ここでいうメトニミーは世間一般に言うところの修辭的技巧や言葉の綾という意味で用いているのではない。実際、メトニミーは一般的な認知過程の反映であり、見た目以上に概念的現象でもある (Goossens (1995), Lakoff (1987), Lakoff and Johnson (1980), Langacker (1993, 2009), etc.)。以下の議論では、メトニミーがこのような特性をもった現象である論拠を示すとともに、メトニミーの認知分析が、「目を見開く」や「目を見張る」のような驚きを合図する慣用表現にも応用できることを実証する。

2. メトニミー

(1)－(4) で取り上げた事例は、一般にメトニミーと呼ばれる現象に相当する。この場合、驚きに付随して現れる（すなわち、驚きと隣接関係にある）目の運動反応を用いて、驚きを指し示している。詳細な分析は3節に回し、まずはメトニミーそのものの位置づけについて論じておきたい。

2.1 メトニミーがもつ概念的側面

従来レトリックの分野では、メトニミーは言葉の綾もしくは文彩の一種として扱われてきた。『ブリタニカ国際大百科事典』には、「ある物を言い表す場合に、その物の属性や、それに関連の深い物をもって言い換えて、その本体の物を表す方法」とあり、言語表現のレベルにおける言い換え現象として、純粋に「言葉の問題」として説明されている。認知言語学的観点から当該現象を分析するのでなければ、概ねこのような世間一般的解釈で事足りるであろう。

ところで、日本語には〔○+手〕の形で「～する人」という意味の表現を作り出す語形成規則が存在するが、この規則では、手（部位）が人（体全体）を指し示しているので、先の『ブリタニカ国際大百科事典』の定義と照らし合わせてみると、メトニミーの一例であると判断できる。

(9) 〔○+手〕の形で「～する人」を指し示す。

話し手、聞き手、読み手、書き手、作り手、受け手、騎手、射手、運転手、操縦手など

ここでは、人間を構成する数ある部位の中から「手」を選択し、これを用いて「人」を指し示しているが、「人」を指し示すことができる媒体は「手」だけではない。その証拠に(10)では、「頭脳」が「人」を指し示している。

(10) その企画を担当する優れた頭脳が必要だ。

それぞれの事例において「手」が「人」と、「頭脳」が「人」と結びついているのには、関連する部位がもつ特定の機能が重要な役割を果たしているようである。

たとえば、人間を構成する数ある部位の中から「手」を選択し、それによっ

て「(行為を行う)人」を指し示すとき、適切な指示関係が確立するのと同時に、手のもつ特定の機能も暗示される。すなわち、行為を行う為の手段・媒体としての「手」である。このように私たちは、手段・媒体としての「手」を参照しながら、「(行為を行う)人」に言及しているのである。(10)でも同様に、「脳」という人間の部位を選択し、これを用いて全体である人間を指し示すとき、適切な指示関係が確立するのと同時に、脳が象徴する知性も暗示されている。(わたしはそのように考えるが)もしそうなら、(9)や(10)のようなメトニミーの事例(延いては、大多数のメトニミーの事例)は単なる言い換えではないことになる¹。このように、私たちは、メトニミーを通して世界の有り様を把握するとき、ある実体をそれと隣接関係にある媒体を用いて指し示すと同時に、その実体をこの特定の関係に基づいて概念化していることを意味する。

つぎに、Lakoff and Johnson (1980: Chapter 8)に従って、メトニミーが言葉のレベルだけでなく概念レベルでも作用することを見てみよう。(11)は、斜体で示した場所がそこに存在する特定の組織を指し示しているという点で、一纏めに括ることができる。すなわち、(11)の斜体部は全て、同じ目的で用いられているメトニミー的代用表現である。さらに、この共有されている目的は、これらの個別的メトニミーに対する上位範疇(「場所を用いて(その場所に設置されている)組織を指し示す」)として一般化できる。

- (11) a. *The white House* isn't saying anything.
b. *Washington* is insensitive to the needs of ordinary people.
c. *The Kremlin* threatened to boycott the next round of takes.
d. *Paris* is introducing shorter skirts this season.
e. *Hollywood* isn't what it used to be.
f. *Wall Street* is in a panic.

(Lakoff (1987: 77))

もしそうなら、(11)のようなメトニミー表現は言葉のレベルで個別に生み出されるのではなく、上位概念(あるいは、概念メトニミー)から生み出されている

¹ メトニミーが単なる言い換え現象でないことは、既にWarren (1999)によって示唆されている。彼女の言葉を借りるなら、私たちがI like Mozart.と言ったとき、曲のみに言及しているのではなくモーツァルトが作った曲に言及しているのであり、The bathtub is running over.と言ったとき、お湯のみに言及しているのではなくバスタブに溜まったお湯に言及しているのである (p.128)。

る個別の事例ということになる。その証拠に、この種の概念メトニミーは汎用性が高く、理屈の上では無制限に応用できる²。たとえば、Lakoff (1987: 77f) は、(12) のような例を挙げてその汎用性を例示している。状況としては、「多くの支社をもつ親会社の経営者が、各支社に対して、それぞれの経営状況を報告するよう指示したが、まだCleveland支社からの報告が届いていない」という設定である。

(12) *Cleveland* hasn't reported. (クリーヴランドはまだ報告を上げていない。)

最後に、Lakoff (1987) に従って、特定のカテゴリーに関わるプロトタイプ効果 (prototype effects; Rosch (1978)) の観点から、メトニミーが概念に関わる現象であることの更なる論拠を示す。一般的に言って、ある下位カテゴリーが全体としての上位カテゴリーを指し示す (すなわち、前者が後者の典型例となっている) と社会の中で広く認識されているとき、この現象こそがメトニミー (PART OF A THING FOR THE WHOLE THING) によって生じたプロトタイプ効果であると考えられる。この関係にある実例としてLakoff (1987: 79-90) が取り上げているのが、母親カテゴリー (mother category) とその成員である「主婦業に従事する母親 (“housewife mother”)」である。アメリカや日本のような社会では、母親は主婦業に従事しているというステレオタイプ (= 先入観や思い込み) が存在する。このため、「主婦」と聞いたときに、その主婦が同時に「母親」でもあると咄嗟に判断してしまう傾向がある。これは、上述のメトニミーが作用したことによるプロトタイプ効果である。

ここで重要なのは、「主婦業に従事する母親 (“housewife mother”)」は概念として存在しているが、固有の名称が与えられていないということである。「主婦

² Lakoff (1987) は概念メトニミーという用語は用いず、「原則 (a principle)」または「メトニミーモデル (a metonymic model)」と表現している。さらに、メトニミーモデルについては、概念Aと概念Bを含む背景知識 (たとえば、組織というものは特定の場所に存在するという背景知識) を伴ったICM (理想化された概念モデル) が与えられると、一方の概念がもう一方の概念を指し示すようなメトニミーモデル (たとえば、PLACE FOR INSTITUTION) が成立することがあると説明している。

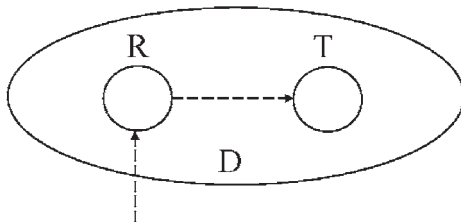
Given an ICM with some background condition (e.g., institutions are located in places), there is a “stand for” relation that may hold between two elements *A* and *B*, such that one element of the ICM, *B*, may stand for another element *A*. In this case, *B* = the place and *A* = the institution. We will refer to such ICMs containing stands for relations as *metonymic models*. (Lakoff (1987: 78))

業に従事する母親」という概念が母親カテゴリーの典型例となってプロトタイプ効果を引き起こすということは、当該現象の背後にあるメトニミーが概念間で作用したことを意味する。このように、メトニミーは単なる言葉の問題ではなく、概念レベルで作用する現象であることがよく分かる³。

2.2 認知的過程としてのメトニミー

私たちは、何らかの理由である対象を把握しにくい場合、それと関連の深い、把握しやすい別の何かを参照点 (reference point) として利用し、本来把握したい対象を把握する。この「何かを目印にしてあるモノを見つける」という人間の認知能力がメトニミーに応用されていると主張する論考に、Langacker (1993, 2009) がある。Langacker は、メトニミーを人間のもつ参照点能力に基盤を持つ認知過程として位置づけている。具体的には、単一のドメイン内で認知的に際立ったものを参照点として言語化し、それと近接関係にある別のものを目標 (target) として選び出し、それに注意の焦点を向ける過程である。(13) はこの認知過程を図示したものである。

(13) 参照点関係



(Langacker (2009: 46))

³ 瀬戸 (1986: 22f) は、佐藤 (1978) の「換喩は現実世界における隣接関係にかかわり、提喩は意味関係における包含関係にかかわる」という主張に言及し、「類一種」という意味的な包含関係に相当する「全体一部分」関係を提喩 (synecdoche) と定義し、現実世界における隣接関係に基づく換喩 (metonymy) の用法と区別するべきだと主張している。関連して Seto (1999) も参照されたい。一方、Radden and Kövecses (1999) は (提喩を含めた) 全てのメトニミーが概念的であると考えているようだが、この主張の検証は本稿の目的ではない。したがって、本稿の立場としては、概念レベルで作用するメトニミーがあるという程度に留めておきたい。

The use of metonymic expressions in language is primarily a reflection of general conceptual metonymies and is motivated by general cognitive principles. We claim that all metonymies are ultimately conceptual in nature and that many, if not most, metonymies do not even show up in language.

(Radden and Kövecses (1999: 18))

(13)において、R、T、Dはそれぞれ、参照点、目標、支配領域（dominion）を意味する⁴。破線矢印は、認知主体（conceptualizer）が参照点を經由して目標に到達する認知プロセスを示す。

(13)の参照点関係の下で、メトニミーが人間の持つ参照点能力の反映だと位置づけるとしても、これだけでは指示的代用過程を参照点関係に基づく認知過程として言い換えただけであり、様々な概念メトニミーを一般的認知過程に還元するという意味で学術的な意義は大きいとしても、前節で観察したようなメトニミー表現の付加的意味合いについては、さらに説明を加えなくてはならないであろう。前節では、「その企画を担当する優れた頭脳が必要だ。」と言ったとき、知性の象徴である「脳」を用いて「知的で有能な人材」を指し示すことをみた。メトニミーにおいて参照点として選択された表現には、それが選択されるに至った理由、言い換えれば、経験的動機づけが存在する。メトニミーは単なる言葉の代用現象ではなく、そこには、参照点のもつ特定の側面と目標を結びつける、経験によって動機づけられた不可視リンクが存在するのである。

3. 分析

3.1 メトニミーに基づく本稿の分析：概略

説明の便宜上この節では、具体的な議論に先立って本稿の分析の骨子を解説しておく。冒頭で述べたように、本稿の主たる目的は、認知言語学の枠組みを用いて(14)と(15)の下線部のような慣用表現を分析することである。

(14) 真奥は反射的に届け先の住所と電話番号を確認し、目を見開いた。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』12)

(15) 「……早くしろ、今ならエミリアともども葬れる。私はゲート制御の力を残しておかねばならないんだからな」

オルバはそう言うと、ローブの懐から拳銃を取り出したではないか。恵美は目を見張る。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』1)

これらの例において、「目を見開く」「目を見張る」はいずれも「驚くこと」を指

⁴ 目標と参照点は隣接関係にあることから、参照点関係に関わる領域（domain）はかなり限定される。支配領域はこのような限定された領域を意味している。

し示している。当該現象は、レトリックの分野でメトニミーと呼ばれる類いの文彩に分類される。関連するメトニミーのタイプは、「顔に表れる運動反応で感情を指し示す (FACIAL MOTOR RESPONSE FOR EMOTION)」とでも言うておこう⁵。

しかしながら、認知言語学の分野では、当該現象は一般的な認知過程として位置づけられる。ここでは、目の運動反応が参照点となり、つづいて目標となる驚きの情動反応に意識が向く。参照点と目標との間には、このような特定の隣接関係が成立してはならない。

(16) は、驚きの出来事を経験することによって抽出された知識の集合体であり、Fillmore (1976) の意味でのフレーム (frame) に相当する。

(16) 刺激 → 情動反応 (驚き)・・・運動反応 (たとえば、目を見開く)

驚きのフレームは、刺激と、刺激に対する驚きの情動反応に加えて、驚きに付随して生じる目の運動反応などを含んでおり、上位カテゴリーである驚きの認知領域の一部を成している⁶。驚きのメトニミー現象では、(16) の「驚きの情動反応」と、それと同時発生的な「目の運動反応」という2つの隣接要素が活性化し、メトニミー操作の入力となる。メトニミーの指示関係において、意図されている目標 (= 驚くこと) は明示的に言及されないため、読み手・聞き手は、(16) と文脈に基づく推論によってそれを検索しなくてはならない⁷。

3.2 驚きの情動反応と付随する目の運動反応

冒頭で既に触れたように、「目を見開く」や「目を見張る・瞪る」といった慣用表現は、しばしば驚きを表す明示的記述を伴って現れることがある。まずは

5 Ekman, Friesen and Ellsworth (1972: 2, note 2) が述べているように、「表情」(facial expressions of emotion) という表現は、心情が顔に表れるという不必要な含意を伴う。このことは日本語にもそのまま当てはまると思われる。Ekman等の造語は facial behavior であるが、彼ら自身も述べているようにこの用語には洗練されていない (awkward) 響きがある。本稿では「顔に表れる運動反応」と表現していくことにする。

6 支配領域または Lakoff (1987) の理想化された認知モデル (Idealized Cognitive Model (ICM))、あるいは Radden & Kövecses (1999) の動作 ICM (Action ICM) を用いることもできる。本稿の分析は動作学的知見を取り入れているので、動作 ICM を採用するほうがより適切なのかもしれない。

7 この指示関係は、Grice (1975) の意味での特殊化された会話の含意 (particularized conversational implicature) に相当する。

「目を見開く」の事例から観察してみよう。(17)－(21)の下線部が示すように、「目を見開く」は様々な驚きを表す記述と共起する。

(17) 真奥たちが暮らすアパートの実情を知っている千穂は驚いて目を見開くが、その後放たれた言葉に身を強張らせる。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』2)

(18) 驚愕の余り目を見開きながら口を両手で押さえ、目を潤ませながら恵美を見ている。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』13)

(19) 衝撃を受けたように、ソフィアが大きく目を見開く。

(あわむら赤光『聖剣使いの禁呪詠唱』11)

(20) 自分の見ているものが信じられず、レギンは目を見開いたまま声を震わせる。

(川口士『魔弾の王と戦姫』5)

(21) 隙だらけになったダリアンのクッキー缶から、ヒューイは最後にひとつだけ残ったチョコクッキーを手を取った。ダリアンはそれを見て、ショックを受けたように目を見開いた。(三雲岳斗『ダントリアンの書架』2)

「目を見張る・瞪る」に関しても、(22)－(25)に示したように、「目を見開く」と同様の共起関係が構築可能であるようにみえるが、実際は、両者の用法には多少の違いがあるようだ。

(22) ちょうど由比ヶ浜に重なるように立っていた一人の少女は俺のほうへ振り向くと、驚きで目を瞪った。

(渡航『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』13)

(23) その金の双眸を見張り、アイズが珍しく驚愕をあらわにしていると…。

(大森藤ノ『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』8)

(24) 雪菜が、信じられないという風に目を見張った。

(三雲岳斗『ストライク・ザ・ブラッド』12)

(25) サツキが衝撃を受けたように、目を瞪る。

(あわむら赤光『聖剣使いの禁呪詠唱』3)

「目を見開く」は、(26)と(27)に示したように、驚きの程度が比較的小さな文脈にも用いられるが、「目を見張る・瞪る」は用いられにくい。

(26) 「え……？」

思わぬところで千穂の名が出てきて真奥が黙り込み、恵美も意外そうに
目を見開く。 (和ヶ原聡司『はたらく魔王様！』13)

(27) クリューゲルは目を見開いた。ひとつの可能性として考えはしたが、本
当にその提案をしてくるとは思わなかったのだ。

(川口士『魔弾の王と戦姫』11)

おそらくこれは、「見張る・瞪る」が比較的強い驚きを合図するため、軽い驚きを示唆する表現と両立しにくいためだと考えられる。このことは、類似表現である「目を剥く」にも当てはまる⁸。

(28) 軟弱者の意外な剣幕に、親しい陰陽師たちも目をむいた。

(海冬レイジ『機巧少女は傷つかない』15)

(29) そんなことを考えたとき、ひとりの兵士が報告に現れる。

「後方の第三部隊が、敵の奇襲を受けました！」

カザコフは目を剥いた。 (川口士『魔弾の王と戦姫』8)

(30) 雷真は驚いて目をむいた。 (海冬レイジ『機巧少女は傷つかない』5)

(31) エレンのつぶやきを聞きとがめたルーリックもそちらに視線を向け、驚
きに目を剥く。 (川口士『魔弾の王と戦姫』8)

(32) 獣にでも出くわしたかのように、学生たちがぎよっと目をむく。

(海冬レイジ『機巧少女は傷つかない』4)

(33) ティグルは目を剥いた。ショックのあまり馬上でぐらりと身体がよろめ
き、仰ぎ見た空がななめに傾く。 (川口士『魔弾の王と戦姫』2)

(34) マトヴェイは仰天して目を剥いたが、ティグルはいくらか落ち着いている。
(川口士『魔弾の王と戦姫』6)

私は、「目を見開く」「目を見張る・瞪る」「目を剥く」といった驚きを合図する慣用表現と(17)－(34)の下線部との共起関係が、驚きという出来事を経験することから形成される概念領域(あるいは、動作 ICM; Radden & Kövecses (1999))の構造を反映していると考えている。このことは、動作学の分野から

⁸ (28) と (29) は「目を剥く」のメトニミー表現である。「目を見張る・瞪る」と同様にメトニミーの用法をもつことを示すために例示した。(30)－(34)は目の運動反応を表わしてはいるが、メトニミー表現ではない。但し(33)はメトニミーの可能性がある。

得られた知見を参照することでさらに信憑性を増すだろう。

Ekman & Friesen (2003: Chapter 4) によれば、驚きは瞬時にして1回性の感情であり、予期していなかった事態に遭遇したことにより引き起こされるか、または、予期していた事態と異なった事態に遭遇したときに引き起こされる⁹。第2に、人が驚いたときに、顔の外観に同時発生的に現れる特徴的变化がある。すなわち、「眉が弓なりに持ち上げられる」「目が大きく見開かれる」「下顎が下がって口が開いた状態になる」といった運動反応である。最後に、驚きには「尋ねるような驚き (questioning surprise)」「驚愕の驚き (astonished surprise)」「呆然とさせるような驚き (dazed surprise)」といったような程度差が観察され、さらには、この順番で顔の特定部位に生じる運動反応の程度に反映される。

これらの知見と前節で提案した(16)の図式を相互参照しながら、「目を見開く」「目を見張る・瞪る」「目を剥く」といった目の運動反応を表す表現が、驚きに関わる様々な表現と共起している事例((17)–(34))を再考してみよう。

(35) 刺激 → 情動反応(驚き)・・・運動反応(たとえば、目を見開く)

驚きの情動反応と、その同時発生的運動反応である上瞼の緊張と下瞼の弛緩(すなわち、目を見開く動作)は強固な隣接関係にある。両者の関係は、驚きという出来事を経験することから形成される概念領域に組み込まれ、たとえば(35)のような形で構造化されている。(35)を所与として、「目を見開く」「目を見張る・瞪る」「目を剥く」といった目の運動反応を表す表現は、(字義的な意味において、)驚きを表す様々な表現と共起することが予測される。実際、(36)(=(7))のように「驚く」に相当する表現と共起して、情動反応に伴う目の運動反応を指し示すことがある。

(36) 「そこに誰がいる——あ！ あなたは！」

驚きに両目を見開いて、ナツコは声を呑む。

(宮部みゆき、『クロスファイア』上)

⁹ 山根(2005)は現象学の立場から、Ekman and Friesenの驚きの情動反応に対する刺激は「意外感」と「驚き」とを混同する通俗的発想であると批判している。山根によれば、「予想に反した時」の典型的な反応こそが「意外感」であり、「驚き」とは区別されるべきものである。「意外感」は刺激そのものに対する反応ではなく、既に解釈された意味に対する反応であるので、「驚き」の反応が終わっても持続することがある。山根の主張には説得力があり基本賛成するものであるが、人間が世界の有り様を現象学的に把握しているかどうかは疑わしい。

Ekman & Friesen (2003) が指摘しているように、驚きの度合いの大きさは目の運動反応の大きさと相関関係にある。このことも驚きの認知領域に反映されていると仮定すると、運動反応の程度が記号化されていない「目を見開く」に関しては、疑問を抱かせる程度の比較的軽い驚きから呆然とさせるような衝撃的驚きまで、広範囲の驚きを限定できることが予測される。一方、目を大きく見開くことを意味する「目を見張る・瞪る」や「目を剥く」は、軽い驚きを明示する文脈とは相性が悪いことが予測される。すでに概観したように、この予測は概ね正しいと思われる。

「目を見開く」「目を見張る・瞪る」「目を剥く」といった目の運動反応を表す表現は、驚きを表す様々な表現と共起するだけでなく、(35) (= (16)) を背景にして、情動反応の原因となっている刺激とも共起することが考えられる。実際、(37)–(38) のような実例が確認できる。

(37) しかし予想に反して、天災は表情も変えず、頷く。

「そうだな。おそらくこのままでは、私は重護に負けるな」

その予想外の答えに、ダルクは本気で驚き目を見開く。

(鳳乃一真『龍ヶ嬢七々々の埋蔵金』10)

(38) 隙だらけになったダリアンのクッキー缶から、ヒューイは最後にひとつだけ残ったチョコクッキーを手を取った。ダリアンはそれを見て、ショックを受けたように目を見開いた。(三雲岳斗『ダントリアンの書架』2)

(37) において、壱級天災の発言はダルクが驚く原因、すなわち情動反応に対する刺激に相当する。また、(38) の下線部が示している状況も同様に、情動反応に対する刺激となっている。

ところで、Ekman & Friesen (2003) が述べているように、驚きは瞬時にして1回性の感情であるが、しばしば驚きにつづいて別の心的態度が喚起されることがある。この現象も百科事典的知識として驚きの認知領域に組み込まれていると考えられる。たとえば、ある衝撃的な事実に対して驚いた後、その事実が受け入れられずショックを受けた状態が継続するような事態である。(38)–(39) はこの事態を記述していると考えられる。

(39) 「君、イルカを知らないのか？」

ティグルは首を縦に振った。

「……海を見たことは？」

今度は首を横に振る。サーシャは目を大きく見開き、信じられないと言いたげな顔でティグルを凝視した。（川口士『魔弾の王と戦姫』6）

- (40) わずかなラグすら起こさない式神に、夏目は唖然と目を瞪る。
(あざの耕平『東京レイヴンズ』08)

3.3 驚きを合図するメトニミー用法

前節では、驚くという出来事に関する認知領域に含まれる、刺激と驚き（及び驚きに伴う目の動作）のモデル（(35) (= (16)）と、それを背景に言語化された様々な事例を観察した。目の動作の表現が驚きを合図するメトニミーとして機能することに関係する重要なポイントは、目を見開くという運動反応が驚きの情動反応と同時発生するということであり、この意味でこの両者が隣接関係にあるということである。この隣接関係は、驚きの経験から抽出・形成される知識スキーマの中で、他の関係よりも際立ちをもつことがある。本稿のメトニミー分析の下で、この特別な関係は、メトニミーの認知過程が適用されるための必要条件として位置づけられる。この隣接関係を所与として、驚きの情動反応にともなって現れる目の運動反応が参照点となり、目標である驚きの情動反応を指し示すことが可能となる。関連する概念メトニミーのタイプは、「顔に表れる運動反応で感情を指し示す（FACIAL MOTOR RESPONSE FOR EMOTION）」である。

驚きを合図する慣用表現としての「目を見開く」や「目を見張る・瞪る」は、文脈の助けを借りながら驚きの情動反応を指し示す¹⁰。たとえば、(41) (= (14) と (42) (= (15)）の「目を見開く」「目を見張る」は、理屈のうえで両義的（ambiguous）であるが、作者がこの文脈で字義的な意味のみを意図しているとは考えにくい。したがって、メトニミー的解釈が優勢である。

- (41) 真奥は反射的に届け先の住所と電話番号を確認し、目を見開いた。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様！』12)

- (42) 「……早くしろ、今ならエミリアともども葬れる。私はゲート制御の力を

¹⁰ 文脈の助け無しにメトニミー的読みが可能になるのは、Warren (1999) の意味での指示的メトニミー（referential metonymy）の事例であろう。たとえば、英語でセキレイを意味する単語 wagtail は、振る（wag）+ 尾（tail）という形式を用いて、尾そのものではなく、尾を上下に振る習性をもつ鳥の名称になっている。

残しておかねばならないんだからな」

オルバはそう言うと、ローブの懐から拳銃を取り出したではないか。恵美は目を見張る。(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』1)

目の運動反応を表す表現のメトニミー用法は、驚きの認知領域を背景として、関連する他の構成要素（たとえば、驚きの原因、驚きの程度、類似感情、後続感情など）と結びつけられる。さらに、この結びつきが言語表現の中に適切に反映されることは、容易に予測できる。実際、(41)–(43)では、驚きの原因となる対象が記述されており、そこから生じた驚きの情動反応が驚きの動作表現によってメトニミー的に合図されている。

(43) これにはオルガも意表を突かれ、細めていた目を大きく見開く。
(川口士『魔弾の王と戦姫』6)

ここで注目すべきは、(42)と(43)において、メトニミー表現の中に驚きの度合いが記号化されていることだ。「目を見張る」ことは「目を大きく見開く」ことと同義であり、いずれも驚きの程度が比較的大きいことを合図する。驚きの程度と、驚きから生じる目の運動反応の程度との間に成り立つ相関関係が、そのままメトニミー表現の中に反映されているのである。

つぎに、目の運動反応を表す表現がメトニミー的に用いられ驚きを合図する一方で、驚きに後続する放心状態や拒絶の評価態度が描写されている事例を見てみよう。

(44) エレンとリムは嫌悪感に満ちた視線を彼女に叩きつけ、マスハスは目を見開いて絶句する。
(川口士『魔弾の王と戦姫』11)

(45) わずかなラグすら起こさない式神に、夏目は啞然と目を瞪る。
(あざの耕平『東京レイヴンズ』08)

(46) 雪菜は呆然と目を見張って、そのでたらめな光景を眺めていた。
(三雲岳斗『ストライク・ザ・ブラッド』)

(44)–(46)では、「目を見開く」「目を見張る・瞪る」が驚きの情動反応を指し示しているだけでなく、描写されている驚きの結果状態から、それが驚愕であることが暗示されている。

つづいて、(47) を考察してみよう。

(47) 「父上……」

悲嘆を固めたような声は、レギンの発したものだ。半年ぶりの再会だったが、彼女の父親はあまりにも変わり果てていた。

「父上…… どうして、そのような」

自分の見ているものが信じられず、レギンは目を見開いたまま声を震わせる。
(川口士『魔弾の王と戦姫』5)

(47) では、「目を見開く」という動作が強い拒否感を伴って一定時間継続したことが描写されている。驚きは瞬時的現象であるので、(47) で表現されている目の動作には、驚愕だけでなく、驚きに後続して生じた拒否の評価態度も含意されている。これは、驚くという出来事を概念化した認知領域の中で、驚きという瞬時的情動反応とその結果状態が紐付けされており、全体としてひとまとまりに把握されていることを示唆している。結果として、「目を見開く」が文脈に依存して驚愕を指し示すとき、紐付けされている結果状態が活性化されるからであろう。驚きに後続する拒否の評価態度は一定時間継続することが可能なので、「目を見開く」という表現も「目を見開いたまま」というように、継続を示す描写になっていることも実に興味深い。

「目を見開く」「目を見張る・瞪る」は、条件さえ整えば、驚きに似た感情を指し示すメトニミー表現として機能することも十分考えられる。(48)－(50)では、「目を見開く」「目を瞪る」といった運動反応を表す表現が、「驚き」だけでなく「意外感」とも結びついている。「驚き」と「意外感」は同じ動作反応を伴う類似感情であるが、前者が刺激そのものに対する瞬時的で一回性の反応であるのに対して、後者は刺激そのものに対する反応ではなく、すでに解釈された意味に対する反応であることに留意されたい(山根(2005: 17))。

(47) それで深雪も一年生たちもひとまず安堵したようだが、克人は持ち上げた眉に、見開いた目に、意外感を残したままだった。

(佐島勤『魔法科高校の劣等生』18)

(48) 真奥が頭を掻きながら呟いたその言葉に、鈴乃は少し驚いたように目を見開いた。

「……意外だ」

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』12)

- (49) 達也の要求を聞いて、真由美は少し意外そうに軽く目を瞞った。
「意外ね」 (佐島勤『魔法科高校の劣等生』 2)

仮に、(48) を (51) のように改変してみよう。

- (51) 「……意外だ」
鈴乃は目を見開きそう眩くと、暫くの間、信じられないといった面持ちで真奥を見つめていた。

(50) において、鈴乃は、普段真奥に対して抱いている印象とは結びつかない彼の発言を聞いて、その意外感を思わず口にする。そして、この意外感は拒否の評価態度に発展して、一定時間持続する。ここで意図されているのは、「目を見開く」が文脈の助けを借りることで、鈴乃の驚きというよりは寧ろ、彼女の意外感を暗示することである。「驚き」と「意外感」は同じ動作反応を伴う類似感情であるだけでなく、時には重複して喚起されることもある。おそらく人間は、この理由のため驚きと意外感を厳密に区別していないのではないだろうか。但し、(51) のように特殊な文脈が与えられると、驚きと意外感は明確に区別され、目を見開く動作反応が意外感を一義的に暗示することも可能になる。

3.4 「目を見開く」が関連する認知領域の構造

前節で論じたように、「目を見開く」や「目を見張る・瞞る」といった目の運動反応を表す表現が、驚きの情動反応を合図するときには、参照点関係に基づくメトニミーの認知過程が作用している。すなわち、驚きの情動反応にともなって現れる目の運動反応が参照点となり、目標である驚きの情動反応を指し示すのである。さらに、この認知過程が適用されるためには、参照点として選ばれる実体と目標として選ばれる実体の間に隣接関係が存在しなくてはならない。とりわけ、この隣接関係は、その性質上私たちの経験に基盤をもつ。すなわち、驚きという出来事の実験から抽出・形成される知識スキーマの中で、驚きの情動反応と目の運動反応は同時発生的な構成要素として (35)(=16) のような形で組み込まれている。両者の関係は、知覚されうる他の隣接関係よりも際立ちをもっている。

情動反応と運動反応のペアリングを考えたとき、驚きと目を見開く動作が唯一の対応関係であったなら、「目を見開く」は唯一的に驚きの情動反応と結びつ

き、結果として直ぐさまメトニミー的解釈を生み出すだろう。しかし、この動作反応は、驚き意外の情動反応や心の変化とも関連づけられることがあるようだ。

議論の手始めとして、Ekman & Friesen (2003: Chapter 7) が想定する怒りの表情を確認することから始めよう。彼らによると、怒りの表情は眉や口に特徴が現れる。眉が下がってお互いに向かって引き寄せられるとともに、眼光が鋭くなる。目が膨らんで見えることもある。口はきつく結ばれるか、正方形に開かれる。

これらの特徴を見てみると、驚きの表情が目の開きと直結するのに対して、怒りの表情は眉の動きや睨みつける行為と結びついていることがわかる¹¹。このことを踏まえながら、(52)–(56) を観察してみよう。

(52) 顔を上げた稲葉は、切れ長の目をこれでもかというくらい見開いて、視殺せんばかりに太一を睨んでいた。 (庵田定夏『ココロコネクト』)

(53) 「……しつげえよ。いい加減にしろ」
「……………」

つい荒くなってしまった語気に小町が唾然としている。だが、固まっていたのも一瞬のことで、すぐにおるおるわなわなと肩を震わせた。そしてくわっと目を見開くと大きな声で言い返してきた。
「……な、なにその言い方あ！」

(渡航『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』 8)

(54) 彼女は目撃する。己の恋人浜面仕上と、その膝の上に座っている謎の金髪幼女を。……滝壺の眠たそうな瞳が、くわあ！！と見開かれる。そして彼女は無表情で玄関のドアノブを握り潰した。

(鎌池和馬『新約・とある魔術の禁書目録』 2)

(55) 部屋に飛びこんできた途端、彼女は鳶色の目を大きく見開いた。
「お、おのれ……な、な、なんという破廉恥な……」

(志瑞祐『精霊使いの剣舞』 3)

(56) 「じ、実はその、エミリアとはまだこういう話、全然できてなくて……」
「お前なあ！」

¹¹ Sato et al. (2019) は日本人を被験者としEkman & Friesenの実験の検証を行い、Ekman & Friesenの普遍的とされる表情の理論が日本人に対して部分的にしか当てはまらないと主張している。

どこまでも言い訳がましいライラの返答に、真奥は目を見開いた。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』13)

これらの例を観察してみると、確かに、睨むという行為が怒りの顕著な特徴として明示的に、あるいは暗示的に描写されていると言えそうだ。ここで、誰かが目に怒りの感情を湛えて（あなたを）睨みつける場面を想像されたい。その人の目が物理的にもイメージ的にも腫れて大きくなっているように見えるのではないだろうか。怒りと結びついた、この意味での「目を見開く」は、驚きを合図する「目を見開く」とは異なった構造と結びついているにちがいない。この違いを(57)として図式化してみよう。

- (57) a. 刺激 → 驚きの情動反応・・・運動反応（目を見開くなど）
b. 刺激 → 怒りの情動反応・・・運動反応（眉が下がって引き寄せられる¹²、目を見開くなど）

(57a) と (57b) はどちらも、刺激から特定の情動反応が喚起されることを概念化している。そして、それぞれの情動反応には、特徴的な運動反応がリンクしている。便宜上、「目を見開く」という同じ表現を用いているが、これらは百科事典的なレベルでは異なったイメージ（たとえば、驚きの感情を湛えた目と怒りの感情を湛えた目、驚きの感情と結びついた目は大きく見開かれる、など）を形成していることに注意されたい。「目を見開く」が驚きを暗示するのか怒りを暗示するのかは、文脈に依存して解釈される。たとえば、(56) では、真奥がライラの言動に苛立ちながら「おまえなあ！」と言っている文脈から、最も関連性の高い怒りの認知領域が読み手の心に表示される。さらに、(57a) の隣接関係を背景にして目の見開き動作が参照点の役割を果たすことで、文脈上最も適した、驚きの情動反応が暗示されるのである。

「目を見開く」は、驚きや怒り以外のモダリティを暗示することもある。たとえば、(58) が示すように、「目を見開く」は何かを思いついたり、発見したりしたときの動作として認識されることもある。

¹² 「柳眉を逆立てる」という慣用語があるように、両眉の内側が下がって引き寄せられ、逆に外側がせり上がる様は、怒りの情動反応として目の見開き動作とともに際立ちを帯びているようである。

(58) 何か重大な事実に気がついたようにカッと目を見開いたのだ。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』14)

さらに(59)では、「目を見開く」が気づき・思いつきを指し示すメトニミー表現として機能している。

(59) 夜の森がどれほど危険な場所か、フィアナが知らないはずはない。

「どうして、そんなこと……」

言いかけて、クレアはハッと目を見開いた。

「ひょっとして、あたしと喧嘩したから……？」

(志瑞祐『精霊使いの剣舞』11)

今回もまた、前回と同様の論理的解釈が適用できる。(59)において、クレアは、フィアナが敢えて危険な森に入った理由を思案している。「ハッと」「ひょっとして、あたしと喧嘩したから……？」といった記述から、最も関連性の高い気づきの認知領域が、私たちの心に喚起される。ここでも、気づきの心的態度と目を見開く動作の隣接関係を背景にして、目の見開き動作が参照点の役割を果たすことで、当該場面に適した気づきの心的態度が暗示されるのである。

4. メタファーとメトニミーの相互作用

4節では、再びメトニミーの概念的側面、とりわけ今回は驚きの概念領域で生じるメタファーとの相互作用に目を向ける。これは、メトニミーもメタファー同様、概念レベルで作用する認知過程であり(Lakoff (1987))、両者が相互作用することがある((Goossens (1995))という仮説を、本稿が扱ってきた驚きを合図する目の動作表現を題材にして、検証及び支持するためである。

4.1 メタフトニミー

既に述べたように、認知言語学の分野ではメタファーとメトニミーは概念的

(i) エリカの双眸が鋭い光を宿した。目を細めるのではなく、逆に大きく見開かれた両目のまなじりが吊り上がる。(佐島勤『魔法科高校の劣等生』12)

(ii) 兄の視線の残影をたどり、「まあっ！」と言わんばかりにまなじりを吊り上げる。(佐島勤『魔法科高校の劣等生』9)
「……綺麗な子ですね」

過程と見なされており、そこでは認知領域という概念が重要な役割を果たしている。たとえば、Lakoff (1987) によれば、メタファーの認知過程とは起点領域 (source domain) から目標領域 (target domain) への写像関係として、メトニミーの認知過程とは理想化認知モデル (ICM) によって構造を与えられた単一の認知領域内での指示関係のズレとして捉えられている。

このようにメタファーとメトニミーは根本的に異なった認知過程であるが、Goossens (1995) が指摘するように、両者の認知領域は相互に関連づけられることがあり、その場合、複合的な認知領域が形成される。このようなメタファーとメトニミーの相互作用を、彼はメタフトニミー (metaphtonymy) と呼んでいる。

まずは、Goossens が論じている相互作用の4パターンを概観することから始めよう。第1のパターンは、「メトニミーを基盤として生じるメタファー (metaphor from metonymy)」であり、このパターンでは、メトニミー表現がメトニミー的意味合いを失い、結果としてメタファーに発展する。たとえば、日常的なコミュニケーションでは、くすくす笑いながら何かを言う場面が想定できるが、ここから「くすくす笑う」という意味の gigue は、「くすくす笑いながら何かを言う」という意味でも用いられるようになる。この場合、gigue (くすくす笑う) を用いて、「くすくす笑いながら何かを言う」を合図するので、メトニミーの意味拡張が関わっている。さらに、実際は嘲笑っていないにも拘わらず、「嘲笑うかのように何かを言う」という意味が生まれる。この意味拡張は、類似性に基づくメタファー的意味拡張である。

第2のパターンは、「メタファーに組み込まれたメトニミー (metonymy within metaphor) である。このタイプでは、メタファーの起点領域または目標領域のどちらかにメトニミーが組み込まれる。“I'd rather bite my tongue off.” (あんな事を言ってしまうなんて、自分の舌を噛み切ってしまいたい) と言うとき、tongue はメトニミー的に「話す能力」を暗示している。さらに、bite one's tongue off 全体を通して、話す能力を自ら失う行為が舌を噛み切る行為に見立てられている。すなわち、bite one's tongue off 全体がメタファー表現である一方、目標領域にある tongue はメトニミー的に「話す能力」を象徴しているのである。

第3のパターンは、「メタファー内部での脱メトニミー化 (demetonymization inside a metaphor)」である。ここでは、メタファー表現の中で本来のメトニミー的基盤が失われる。例として、to pay lip service (～に賛同するが実行しない) がある。lip service はもともと、聖書で「唇 (= 言葉) だけの表面的信仰」

を意味していたが、その後 to pay lip service 全体のメタファー的意味が優先される一方で宗教的意味が漂白され、さらに唇と言葉の指示関係が解離した。このように、to pay lip service は、lip が元々メトニミー的に暗示していた言葉の意味合いを消失した結果、形式はそのままに「賛同するが実行しない」という意味で用いられるようになっていく。

最後のパターンは、「メトニミー内部に組み込まれるメタファー (metaphor within metonymy)」である。このパターンは、メタファーがメトニミーに表現力を加えるために用いられるときに生じる。具体例としては、“I’m not used to standing on my hind legs in front of a large group of people.” (私は大勢の人の前でスピーチをするのに慣れていない) のように言ったときの、on my hind legs がある。私の後ろ足 (my hind legs) と言うとやや奇妙な響きがあるが、これは人が背筋を伸ばしてシャキッと立つ姿を、馬などの動物が後ろ足で立ち上がる様に見立ててのことであろう。このように、メタファー表現全体 (stand on my hind legs) として、次に起こるサブイベント (すなわち、スピーチを始めること) またはスピーチ全体をメトニミー的に指し示すというのが、当該事例の図式である。

4.2 驚きを合図するメトニミー表現とメタフトニミー

本節では、驚きを合図する目の動作表現に関して、メタファーとメトニミーの相互作用が観察される論拠を示す。意図するメタフトニミーのパターンは、4番目の「メトニミー内部に組み込まれるメタファー」である。さっそく具体例を挙げてみよう。

(60) 「そんなに気に入ったのなら、やろう」

ほんの少し、彼女は目を丸くした。(秋『魔法学院の不適合者』2)

(61) まるで現場にいたかのように状況を言い当てる鈴乃にエメラダは目を丸くした。(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』12)

(62) 何だよ? と視線で問うと、雪ノ下は大きな瞳を丸くしてこちらを見ていた。

「驚いた。詳しいのね」

(渡航『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』)

(63) ベルニナは俺の首に手を回して抱きついた。小海さんも桜井も目を丸くして見た。(豊田巧『Rail Wars!』2)

(64) 珍獣でも見たかのように目を丸くする稲葉。

(庵田定夏『ココロコネクト』)

(60)–(64) では、「目を丸くする」という表現が「驚くこと」を合図している。これは、「目を見開く」が「驚くこと」を合図するのと全く同じで、メトニミーの事例である。一方、「丸(くする)」は、驚いたときの目の形を図形に見立てているので、メタファーだと考えられる。関連するメタフトニミーのタイプは、上述のように「メトニミー内部に組み込まれるメタファー」となる。以上のように、メタファーとメトニミーは根本的に異なった認知過程であるが、両者の認知領域は相互に関連づけられることであると証明された。

余談ではあるが、日本語では(65)のような事例も目にすることがある。

(65) 「……………よんまんえん？」

臨戦態勢だった鈴乃の目が点になる。

(和ヶ原聡司『はたらく魔王様!』3)

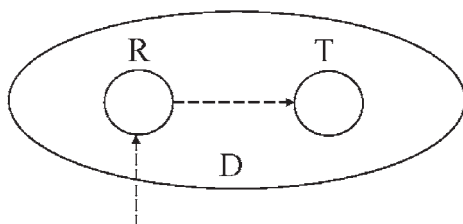
漫画で目を点のように描いて驚きを表す手法を経験的知識基盤として、「目が点になる」というメタファー表現が生み出された。今回は、マンガの段階で既にメタファーであることを考えると、「目が丸くなる」に倣って画像を言語化したと言った方が適切かもしれない。いずれにしても、メタファーが組み込まれた表現全体「目が点になる」がメトニミー的に驚きを合図しているので、(65)もまたメタフトニミーの事例ということになる。

5 まとめ

本稿では、「目を見開く」や「目を見張る」といったような目の運動反応を表す表現が、驚きの情動反応を合図する用法を、認知言語学の立場から分析した。具体的には、当該現象にはメトニミーの認知過程が作用していると主張した。関連するメトニミーのタイプは、「顔に表れる運動反応で感情を指し示す(FACIAL MOTOR RESPONSE FOR EMOTION)」である。

認知言語学におけるメトニミーは、単一のドメイン内で認知的に際立ったものを参照点として言語化し、それと近接関係にある別のものを目標として選び出し、それに注意の焦点を向ける過程として捉えられる。

(66) 参照点関係



(Langacker (2009: 46))

目の動作を表す「目を見開く」が驚きの情動反応を合図する場合は、目の運動反応が参照点となり、つづいて目標となる驚きの情動反応に意識が向く。

参照点と目標との間には特定の隣接関係が成立してはならないが、この隣接関係は、驚きの出来事を経験することによって抽出された知識の集合体である (67) (= (16)) から導き出される。

(67) 刺激 → 情動反応 (驚き)・・・運動反応 (たとえば、目を見開く)

(67) は、刺激と、刺激に対する驚きの情動反応に加えて、驚きに付随して生じる目の運動反応などを含んでおり、上位カテゴリーである驚きの認知領域の一部を成している。驚きのメトニミー現象では、「驚きの情動反応」と、それと同時発生的な「目の運動反応」という二者の隣接関係が活性化し、メトニミー操作の入力となる。メトニミー的指示関係において、意図されている目標 (= 驚くこと) は明示的に言及されないため、読み手・聞き手は、(67) と文脈に基づく推論によってそれを検索しなくてはならない。

参照文献

Ekman, Paul, Wallace V. Friesen and Phoebe Ellsworth (1972) *Emotion in the human face: guidelines for research and an integration of findings*. New York: Pergamon Press.

Ekman, Paul and Wallace V. Friesen (2003) *Unmasking the face: a guide to recognizing emotions from facial expressions*. Rpt. of 1976. Cambridge, MA: Malor Books.

- Fillmore, Charles J. 1976. Frame semantics and the nature of language. *ANNALS of the new York academy of sciences*, volume 280, issue 1. The New York Academy of Sciences: 20-32.
- Gibbs, Raymond W. 1999. Speaking and thinking with metonymy. In *Metonymy in language and thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther & Günter Radden, 61-76. Amsterdam: John Benjamins.
- Goossens, Louis. 1995. Metaphonymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action. In *By word of mouth: metaphor, metonymy and linguistic action in a cognitive perspective*, ed. by Louis Goossens, Paul Pauwels, Brygida Rudzka-Ostyn, Anne-Marie Simon-Vandenberg & Johan Vanparys, 159-175. Amsterdam: John Benjamins.
- Goossens, Louis, Paul Pauwels, Brygida Rudzka-Ostyn, Anne-Marie Simon-Vandenberg & Johan Vanparys, eds. 1995. *By word of mouth: metaphor, metonymy and linguistic action in a cognitive perspective*. Amsterdam: John Benjamins.
- Grice, Paul. 1975. Logic and conversation. In *Syntax and semantics, volume 3: speech act.*, ed. by Peter Cole and Jerry L. Morgan, 41-58. New York: Academic Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George & Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of cognitive grammar vol.1: theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in cognitive grammar*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Radden, Günter & Zoltán Kövecses. 1999. Towards a theory of metonymy. In *Metonymy in language and thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther & Günter Radden, 17-59. Amsterdam: John Benjamins.
- Rosch, Eleanor. 1978. Principles of categorization. In *Cognition and categorization*, ed. by Eleanor Rosch & Barbara B. Lloyd, 27-48. Hillsdale, NJ: Lawrence

Erlbaum.

Rosch, Eleanor and Barbara B. Lloyd, eds. 1978. *Cognition and categorization*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Sato, Wataru, Sylwia Hyniewska, Kazusa Minemoto, Sakiko Yoshikawa. 2019. Facial expressions of basic emotions in Japanese laypeople. *Frontiers in Psychology*. DOI : 10.3389/fpsyg.2019.00259.

Seto, Ken-ichi. 1999. Distinguishing Metonymy from Synecdoche. In *Metonymy in language and thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther & Günter Radden, 91-120. Amsterdam: John Benjamins.

Warren, Beatrice. 1999. Aspects of Referential Metonymy. In *Metonymy in language and thought*, ed. by Klaus-Uwe Panther & Günter Radden, 121-135. Amsterdam: John Benjamins.

佐藤信夫. 1978. 『レトリック感覚』. 東京: 講談社.

瀬戸賢一. 1986. 『認識のレトリック』. 東京: 海鳴社.

山根一郎. 2005. 「「驚き」の現象学」. 『椋山女学園大学研究論集（人文科学篇）』 36: 13-28.